

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 8 日現在

機関番号：37501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381163

研究課題名(和文) 地域生活慣行の保育・教育機能と発達促進に関する臨床的研究

研究課題名(英文) A Study on the Developmental Function through Traditional Practice in Our Childhood

研究代表者

山岸 治男 (Yamagishi, Haruo)

日本文理大学・工学部・教授

研究者番号：40136768

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幼少年期の集団参加体験が感性・社会性・主体性発達の基礎であるという仮説を、教育学、社会学、社会福祉学、民俗学等の視点から検討し、可能な限り臨床的に実証しようとしたものである。方法として保育所の観察、地域子ども行事の観察、中学校教育相談室での参与観察、先行研究の検討、諸学会出席による多様な視点の確保等を継続した。成果は次の通りである。

地域生活慣行には一般に、参加仲間との間に 身体的関与、社会的関与、感情の交換が伴う。息遣いを感じ、役割を期待し、結果を歓喜しあう。そこに他者との一体感が生まれ関係調整力を習得するのである。この体験が無い場合、思春期にひきこもりがちになる場合がある。

研究成果の概要(英文)： The purpose of this study is to make clear the function of folkways of promoting our physical and mental development in our childhood. The conclusions are as follows:(1) There is a process in folkways which obliges children to join a children's group.(2) During this process the children compete with others in play, games and work. And cooperate with them in plenty of work of mutual aid. These activities enable the children to join a playmate company, get over their parent-child relationship and develop their sociability.

研究分野：教育社会学

キーワード：地域生活慣行 集団参加 心身の相互関与 役割期待 役割遂行 役割自覚 役割の達成・成就感 自律性

1. 研究開始当初の背景

研究開始時、研究者(以下、私)は公立中学校のスクールカウンセラーを併任していた。そこで出会う「引きこもり傾向」の生徒や保護者と関わりながら、幼少年期の生活体験を聞き取る作業を継続。この過程で、生徒の多くが集団参加を十分にはしていないことがわかる。相談室で単にカウンセリングを行うというのみでなく、来室する生徒同士(私を含めて)で心身の交流を伴う遊びや軽い競技を繰り返す。この過程で、会話がはずんだり、やがて教室に還ったりする生徒が現れてきた。本研究の背景にはこうした思春期の生徒との出会いがある。さらに言えば、子どもたちを「引きこもり傾向」にしないための具体策を探りだす必要性を強く感知したことも、本研究に取り組もうと考えた背景である。

2. 研究の目的

幼少年期の集団参加を促す活動として古来行われて来た活動に着目した時現れるのが「地域生活慣行」である。地域生活慣行が内包する、人の発達促進機能を探ることが本研究の目的である。

なお、地域生活慣行に人の発達を促す機能があることが解れば、一般に言われる生活体験を日常の家庭生活や地域生活において取り入れる対応が問われることになり、近時、再微増し始めたといわれる「不登校傾向の児童・生徒」の数を緩和させることも鹿野になる。こうした臨床的研究が教育社会学においてもっと進められてもよいではないかという施策をしていたところである。

3. 研究の方法

可能な限り臨床的場面に立ってという考えがあったので、本研究においては次のような研究方法を採用した。

まず、保育所の園児の活動を現場で観察することである。大分市内の1認可保育所に週1回(3~4時間程度)計45回ほど通い幼児の活動を観察させていただく。いろいろな参考場面に遭遇したが、例えば、橋渡しされた丸太棒の上を歩いて渡ろうとする場面で、幼児は自分の今の能力で渡ることができるかどうかを幾度も丸太に触りながら考える。できないと判断した場合、自分で出した結論のせい、周りから何か言われても気に留めていない様子である。逆にできると判断して渡り始めると、周囲の友達からの声援があり、渡りきることで再度自信を得ているような表情になる。こうした観察の過程で、幼児の活動に、周囲との関係や自分の判断など、多様な活動意思決定があることに気づいたところである。

次に、地域で行われる子どもを中心に構成

する地域行事の観察である。夏祭り子ども神輿担ぎと小学校及び校区の運動会を対象場面とした。以前にはあった諸行事が消滅していることも確かめる。子ども神輿は、外観のみ観察すれば、大勢の子どもたちの単なる賑わいに過ぎないように見えるかもしれない。だが、神輿を担ぎ、声を上げて叫び、出る汗をこらえたり袖で拭き取ったり、さらに足を踏まれたり踏んだりする事態も体験する姿を深く観察すると、そこに、文字通り人の交流・ふれあい・コミュニケーションなどが相互に行きかう場面であることがわかる。見逃すことのできない心理的・社会的交流が進行する姿といえようか。

第三に、先行研究を掌握し、地域誌に目を通したことである。先行研究は、私が検索した範囲では、まだほとんどないというも過言でない状況である。地域誌には、当該地域の子ども行事等が写真と文章による紹介として記載されているが、それらの写真や記事から推し量ることができる範囲ぎりぎりのところまでを推測することになる。こうして検討していくと、今日、教育機関としての学校がここまで発展。整備されたにもかかわらず、「実際の集団的生活体験」という意味では、今日の教育に、ほとんどだれも気づかないまま放置されている「潜在的発達促進カリキュラム」とでも呼ぶべき教育課程が見向きもされない状態になっているかもしれないことに気づくところである。

同時に、最後にもう一つ、研究に多様な視点を導入できるよう、複数にわたる学会参加を相応に行ったことである。日本教育社会学会をはじめ、教育学会、社会学会、社会福祉学会など、中央学会、地方学会のどちらにも参加の機会を得ることができた。学会参加を通して気づくのは、類似の機能や進行過程について、学界によってネーミングが異なったり、視点が異なったりすることが案外多いことである。

4. 研究成果

地域生活慣行には、学校のような顕在化したカリキュラムは見当たらないが、例えば、身体的接触、時には汗を浴びたり浴びせたりする事態が展開する。掛け声も一斉に行うので相互に呼吸を合わせなければならない。こうした心身の交流(身体、感情、役割などの相互期待)が感情や社会性さらには主体性の発達を促し、「引きこもり」を予防する側面があることに気づくところである。

これはスポーツにも類似の面があることに気づかせる。野球のように、ホームインなどの場面を除くと比較的ゆっくり事態が進行するスポーツもあるが、サッカーやバレーボールのように一瞬ごとに手に汗する事態が進行するスポーツもある。地域生活慣行もこれらと類似することに気づくところである。たとえば、ひな祭りや端午の節句などの

行事は、子どもの活動が緩やかに進行する。客（友人）に飲み物を勧め、帰りを門まで見送る活動にも心身の交流はあるが事態は緩やかに進行する。

これに対して、神輿担ぎは一瞬一瞬が速い速度で進行する。一瞬ごとに子どもたちは目の前の事態に適切に対応しなければならない。こうした活動は、待ったなしの差し迫った役割行動をいわば強制する。この強制性が、ここでは重要である。今日、何事も強制は良くない、いつでもやり直しが効く、ダメでもそれでよいなどの状況が至る所に広がっている。それは一般には良いことであるが、しかし、強制性が伴わなければとんでもないことになる実際的な場面もあることを覚えておかなければならないであろう。例えば、ある程度幅のある川を、川に落ちないで飛び越えなければならない場合などである。ゆっくり順序よく飛び越えることは不可能である。そこは一気に行動しなければならないことになる。サッカーで、目の前にパスされたボールは躊躇なくシュートしなければ意味がない。パスされ、トスされたバレーボールは躊躇なくシュートされるのでなければスポーツの意味がなくなる。

子どもは、例えば子供神輿を担ぐというような地域生活慣行において、これらスポーツの場合と同様の場面に遭遇するのである。それは、したがって黙殺しては困る儀礼の一部といえる。子ども行事という通過儀礼を通して、感情の調節、社会的役割の自覚、他の友達との程よい心的距離の取り方などを学ぶのである。

今日の子どもにこうした通過儀礼が果たしてどの程度残っているであろうか。研究全体を通じて理解したのは、日々の地域生活において獲得していた心身の発達課題を今日では、顕在化した学校カリキュラムにおいてしか期待できなくなった点である。本研究では「引きこもり傾向の児童・生徒」を中心に検討したが、そうした傾向が特にはなくても、将来像が描きにくい子ども、希望を持ってない子どもなど、枚挙にいとまがないほど子供の発達をめぐる問題が生まれている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 3 件):

山岸治男

・「幼少年期の伝承民俗における発達体験について」(日本文理大学紀要 43-1.平成 27 年 3 月).....本論文は、地域における子どもの行事に着目し、その実態を観察した場合に、人の発達という視点から見て、どんな発達促進機能があると考えられるか、事例に即して検討したものである。本論文執筆時において

は、地域生活慣行に人の発達を促す機能があるという点までの指摘はしたが、そのメカニズムについて触れるはまだ研究が不十分でできなかった。

・「ススクール・カウンセラーの有効活用と学校経営」(日本文理大学紀要 44-1.平成 28 年 3 月).....本論稿は「研究ノート」として公表したものである。本研究の進行過程において、普段、私が行っているスクールカウンセリングについて、本研究の視点から探るとより良いカウンセラーの活用が可能ではないかと考えたところである。大分市の G 中学校には・S・C として 5 年間勤務したが、この中学校の S・C 活用実績に他の学校とは異なる仕組みがあることに気づいたので、その仕組みについてまとめたところである。

・「地域生活慣行の発達支援機能に関する研究」(生活験学習学会誌 16.平成 28 年 7 月).....地域生活慣行に発達促進機能があることについては、前の論文に記したところである。本論文では、そのメカニズムについて検討したことをまとめた。研究の方法の欄でも触れたが、スポーツの場合を例示しながら、地域生活慣行が幼い子どもたちに、相応に他者との触れ合いの楽しさや厳しさ、役割期待と役割自覚、役割遂行時の期待の厳しさ、それ故にこそ感知する遂行。成就時の喜びなどの分析を試みたところである。

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山岸治男 (Yamagishi Haruo)

日本文理大学・工学部・教授

研究者番号：40136768

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()